

6 3 3 1 - 1 6 2
平成 1 7 年 2 月 2 3 日

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除所長

平成 1 6 年度病害虫発生予報第 1 1 号について
平成 1 6 年度病害虫発生予報第 1 1 号を発表したので送付します。

平成 1 6 年度病害虫発生予報第 1 1 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。
発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	スクミリンゴガイ	並	2
冬春キュウリ	うどんこ病	やや少	2
	べと病	並	2
	灰色かび病	やや少	3
	褐斑病	やや多	3
	ミナミキイロアザミウマ	やや少	3
コナジラミ類	やや多	3	
冬春ピーマン	うどんこ病	多	3
	斑点病	やや少	3
	ミナミキイロアザミウマ	やや少	4
	ヒラズハナアザミウマ	やや少	4
	コナジラミ類	やや少	4
黒枯病（仮称）		4	
冬春トマト	葉かび病	やや多	4
	灰色かび病	並	4
	ハモグリバエ類	少	5
	コナジラミ類	少	5
	トマト黄化葉巻病（TYLCV）		5
冬春イチゴ	うどんこ病	やや多	5
	灰色かび病	やや多	5
	ハダニ類	並	5
カンキツ	ミカンハダニ	やや多	6
茶	カンザワハダニ	やや多	6

作物の生育状況（2月中旬）

冬春キュウリの促成栽培、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春イチゴは収穫期であった。

3月の気象予報

平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は「平年並」か「低い」、降水量は「平年並」か「多い」、日照時間は「平年並」か「少ない」と予想されています。

（1か月予報 鹿児島地方気象台 2月18日発表）

発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1. スクミリンゴガイ (並)

[予報の根拠]

- 1) 水稲収穫後の未耕起水田(佐土原町)での2月下旬の㎡当り総貝数6.8頭(平年7.1頭)、生貝率51.8%(平年50.7%)はいずれも平年並である。
- 2) 用水路での㎡当り総貝数45.7頭(平年27.0頭)は平年よりやや多、生貝率72.3%(過去8か年平均58.9%)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 水田に生息する貝は、耕耘により破碎し防除する。この場合、土壌が硬いほど、耕耘ピッチが小さいほど、貝が大きいほど殺貝効果が高い。耕耘する深さは殺貝効果にあまり違いがないので、貝が主に越冬生息している土壌表層部を細かく耕耘するのが有効である。
- 2) 用排水路からの侵入を防ぐため水の出入り口にネットを設置する。
- 3) 田植後2~3週間ではできるだけ水深1cm以下の浅水管理とする。
- 4) 貝の生息が多い場合には、薬剤の育苗箱施用と本田施用を実施する。

冬春キュウリ

1. うどんこ病 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率18.2%(平年42.2%)、発病葉率2.5%(平年6.9%)は平年よりやや少ない。
- 2) 半促成栽培では定植直後ということもあり発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので発病を確認したら早めに防除する。
- 2) 耐性菌を生じやすいので系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- 3) 乾燥時に発生が多くなるのでほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。
- 4) 半促成栽培でも急速に病勢が進展することがあるので促成栽培と同様の注意が必要である。

2. ベと病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率72.8%(平年78.6%)は平年よりやや少、発病葉率24.0%(平年21.4%)は平年並である。
- 2) 半促成栽培では発生未確認である。
- 3) 1か月予報では、平年に比べて曇りや雨の日が多く、降水量は「平年並」か「多い」と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすく、発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- 2) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

3. 灰色かび病 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率9.1% (平年31.2%)、発病果率0.2% (平年2.1%) は平年よりやや少ない。
- 2) 半促成栽培では発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内が多湿にならないように換気や灌水に注意する。
- 2) 予防及び発病初期の防除を徹底する。
- 3) 耐性菌が発生しやすいので系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4. 褐斑病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率45.5% (平年31.6%) は平年並、発病葉率15.6% (平年4.9%) は平年よりやや多である。
- 2) 半促成栽培では発生未確認である。
- 3) 1か月予報では、平年に比べて曇りや雨の日が多く、降水量は「平年並」か「多い」と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
- 2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。

5. ミナミキイロアザミウマ (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率0.0% (平年17.4%)、10花当虫数0.0頭 (平年0.5頭) で平年より少ない。
- 2) 半促成栽培では、発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。

6. コナジラミ類 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率27.3% (平年18.5%) は平年並、百葉当虫数8.36頭 (平年2.18頭) は平年よりやや多い。
- 2) 半促成栽培では、発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。

冬春ピーマン

1. うどんこ病 (多)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率60.0% (平年40.4%) は平年よりやや多く、発病葉率8.4% (平年4.1%) は平年より多い。

[防除上の注意]

- 1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- 2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので発病を確認したら早めに防除する。

2. 斑点病 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率10.0% (平年35.1%)、発病葉率0.1% (平年3.8%) は平年よりやや少ない。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。
- 2) 病原菌が植物体に侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

3 . ミナミキイロアザミウマ (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率0.0%(平年35.9%)、10花当り寄生虫数0.0頭(平年1.8頭)は平年より少ない。

[防除上の注意]

- 1) 一部のほ場ではわずかに発生が見られ、今後温度の上昇とともに例年増加していく時期であるので注意が必要である。
- 2) 10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始める。また発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除を徹底する。

4 . ヒラズハナアザミウマ (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率10.0%(平年16.4%)、10花当り寄生虫数0.06頭(平年6.1頭)は平年よりやや少ない。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除を徹底する。

5 . コナジラミ類 (-)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率30.0%(前月20.0%)、百葉当たり虫数5.5頭(前月2.7頭)で、先月と比べ発生面積、百葉当たり虫数ともに増加している。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。

6 黒枯病 (仮称)

病害虫防除情報第6号(平成17年2月15日発表) 参照

[防除上の注意]

- 1) 2月中旬の巡回調査ほ場では発生面積30.0%(前月30.0%)、発病葉率0.9%(前月0.5%)である。
- 2) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。
- 3) 被害茎葉、果実は伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処理する。
- 4) 1か月予報では、平年に比べて曇りや雨の日が多く、降水量は「平年並」か「多い」と予想されている。今後、気温の上昇に伴い発病に好適な環境になるので注意する。

冬春トマト

1 . 葉かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率20.0%(平年7.2%)、発病葉率2.2%(平年0.5%)は平年よりやや多い。
- 2) 1か月予報では、平年に比べて曇りや雨の日が多く、降水量は「平年並」か「多い」、日照時間は「平年並」か「少ない」と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

2 . 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率10.0%(平年5.2%)は平年並、発病果率0.4%(平年0.2%)は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 低温多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下をはかり、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- 2) 花弁の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 . ハモグリバエ類 (少)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率0.0%(平成35.1%)、寄生葉率0.0%(平成4.1%)は平成より少ない。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので初期防除を徹底する。

4 . コナジラミ類 (少)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の巡回調査では発生面積率0.0%(平成42.1%)、百葉当たり虫数0.5頭(平成6.38頭)は平成より少ない。

[防除上の注意]

- 1) シルバーリーフコナジラミはトマト黄化葉巻病を媒介するので、後述の「5. トマト黄化葉巻病(TYLCV)」を参考に防除する。
- 2) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

5 . トマト黄化葉巻病(TYLCV)

[防除上の注意]

- 1) 黄色粘着トラップ等を設置し、シルバーリーフコナジラミ(媒介虫)の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- 2) 施設内外の雑草はシルバーリーフコナジラミの寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- 3) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

冬春イチゴ

1 . うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の葉での発生面積率33.3%(平成26.3%)は平成並、発病葉率5.5%(平成1.5%)は平成よりやや多い。
- 2) 果実での発生面積率8.3%(平成14.2%)、発病果率0.2%(平成0.7%)は平成並である。

[防除上の注意]

- 1) 葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- 2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- 3) 発病果など被害部は伝染源になるので早めに取り除きほ場内に放置しない。

2 . 灰色かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率16.7%(平成5.5%)は平成よりやや多、発病果率0.3%(平成0.2%)は平成よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、換気をはかると同時に、薬剤散布、灌水にあたっては施設内の空気湿度を高めないように留意する。

- 2) 病果や病葉は早めに摘除してほ場内に放置しない。
 3) 薬剤耐性菌が出現しやすいので系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3. ハダニ類 (並)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率 25.0% (平年 45.2%) はやや少、寄生株率 4.7% (平年 9.8%) は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
 3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

カンキツ

1. ミカンハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率 51.8% (平年 45.0%) は平年並、寄生葉率 21.2% (平年 7.7%) は平年より多い。

[防除上の注意]

- 1) 越冬密度の高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では、春季 (3月上~中旬、萌芽前) にマシン油乳剤による防除を行う。

茶

1. カンザワハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率は、摘採面では 40.0% (平年 36.4%) で平年並であるが、すそ部 (樹幹内部) では 66.7% (平年 57.4%) で平年よりやや多い。

[防除上の注意]

- 1) 防除適期は、増殖が始まる前の密度の低い時期 (3月上~中旬) で、株の内部やすそ部の葉裏に多く生息しているので、十分な薬液が到達するように丁寧に散布する。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
 特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤 (商品名、マリックス乳剤、粒剤等) は使用しないこと。

- 3 発生量 (程度) の区分

多	い	(高	い)	やや多いの外側 10% の度数の入る幅
やや多い		(やや高い)		平年並の外側 20% の度数の入る幅
平年並				平年値を中心として 40% の度数の入る幅
やや少ない		(やや低い)		平年並の外側 20% の度数の入る幅
少ない		(低	い)	やや少ないの外側 10% の度数の入る幅
(平年値は過去 10 年間の平均)				

4 予察情報の種類

病虫害防除所から発表する情報は次の5つです。

- 1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- 2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- 3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- 4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。(従来の防除速報にあたる)

お知らせ(<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病虫害防除所では、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を登録しています。ぜひご利用ください。

<p>【文書取扱】 病虫害防除所 櫛間 TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499 E-mail : kushima-yoshiyuki @pref.miyazaki.lg.jp</p>
